

各地で話題の病害虫

ナンヨウキクイムシ

学 名 : *Euwallacea fornicatus* (Eichhoff)

2006年6月下旬に種子島のハウスマンゴウで、主枝、亜主枝単位で枝が衰弱し、肥大期の果実が萎凋する被害が発生した。これらの枝では分岐部の組織が壊死していた。樹皮には直径1mm程度の穿入孔が多数確認され、木質部内に本種の幼虫・蛹・成虫が確認された。

雌成虫の体長は2.5mm内外。体色は光沢のある黒色で、口器、触角、脚は赤褐色、体表はまばらな黄色の毛に覆われる。前胸背板の前方に同心円状の鱗片状突起をそなえ、その後方は弱く点刻される。上翅の長さは幅の約1.2倍、点列部は浅く大きな点刻からなり、列間部には刺毛をそなえた1条の点刻列がある。斜面部は隆起せず、側縁は縁取られる。

本種の成虫は木部に孔道を形成、その内壁に餌となるアンブロシア菌を接種し、繁殖した菌のみを成虫・幼虫ともに食餌する。幼虫は成虫の穿った孔道内のみで生育し、木部を食害しない。台湾などでは茶の加害、アメリカでは花き類への加害が報告されている。日本では小笠原諸島父島及び徳之島でマンゴウへの加害が報告されている。



写真提供：(独) 森林総合研究所 後藤氏

登録農薬がないため、加害された木質部は削り取り、保護剤の塗布でゆ合を促すなど、耕種的防除に努める。



写真提供：鹿児島県病害虫防除所 篠原氏

海外のニュース 米国カリフォルニア州におけるリンゴウスチャイロハマキの発見

2007年2月、米国カリフォルニア州アラメダ郡（サンフランシスコ湾東岸）において、本種の疑いのあるハマキガが発見され、同年3月22日に米国農務省によりリンゴウスチャイロハマキ (*Epiphyas postvittana*) であることが確認された。

本種はチョウ目ハマキガ科に属し、オーストラリア原産でニュージーランド、英国及びアイルランドにも侵入している。米国においては、ハワイ州で報告されていたが、米国本土においては初めての発見である。

本種は、寄主範囲が大変広く、核果類（モモ、スモモ、ネクタリン、サクランボ、アンズなど）、リンゴ、ナシ、ブドウ、カンキツ類、花き類など重要な農作物や苗木類に深刻な被害をもたらすおそれがある。

本種の成虫の開張は、18mmである。雌成虫は羽化後6～10日で産卵を開始し、寄主植物の葉の表面に3～150個の卵を塊で産みつける。ふ化した幼虫の体長は約1.6mmで、頭部は薄い茶色、胴体は薄い黄緑色を呈している。好適な

採食場所に移動し、葉や果実を紡いで巣を作る。終齢幼虫の体長は、10～20mmである。蛹化は、巣の中の薄い繭の中で起こる。通常年3世代で、幼虫態で越冬する。リンゴの場合、果実の成長が進むと、食害された場所がコルク状となって現れてくる。

本種の発見を受けて米国当局は、本種の発生状況を把握するため、フェロモントラップを用いた発生境界設定調査を開始し、かつ、カリフォルニア州における発見郡及びハワイ州全体を規制地域として指定し、関連品目の移動を制限している。なお、我国の輸入検疫で、ニュージーランドのピーマンから8件発見されている。

(参考) http://www.aphis.usda.gov/plant_health/plant_pest_info/lba_moth/index.shtml

発行所 横浜植物防疫所

発行人 川口 嘉久

編集責任者 金田 昌士

掲載 植物防疫所ホームページ <http://www.pps.go.jp>